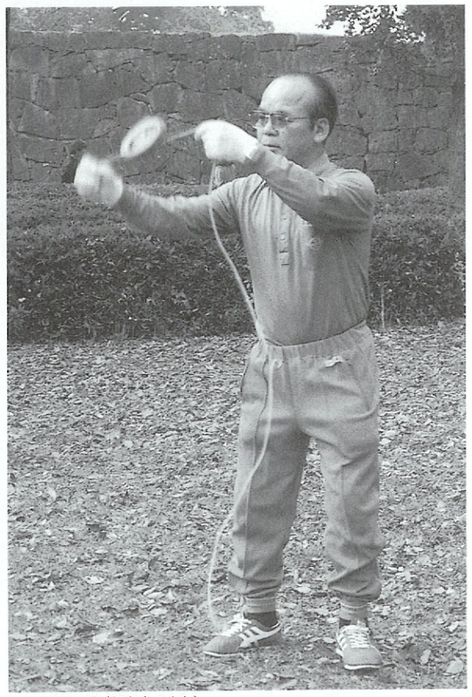
くまもとの遊びと文化

創る

「学校ではよくこま回しをやってました。こまは買いますが、ヒモはこまの回るパワーを変える力があるので、みんな自分で作っていました。仲間でそれを競いあうんですが、最初から一人で作れるはずはありません。だからといって誰も教えてくれないので、先輩にくっついて作り方を盗み、それから自分で工夫してより良いモノにしていきました。考えてみれば、ああやって生きる知恵や社会のルールみたいなものを学んできたのかもしれない」。――

綱田誠さん（宇土郡不知火町出身・在住／28歳）



ちょんかけごま（保存会の方々）

「一本の棒が、刀で銃で杖で……というように遊びに発展性がありました。今は、遊びの道具そのものが目的になっているようです」と語るのは、今の子供たちに最も身近にふれている保育園園長の……

村上千幸さん（菊池郡七城町出身・鹿本郡植木町在住／34歳）。

何もないところから遊びを〝創る〟。もっと楽しく遊ぶためにルールを〝創る〟。従来の遊びに子供たちの好奇心をプラスして、さらにおもしろい遊びに〝創り変える〟。創ることは、小さな発見を大切に、皆の力を合わせてステップアップさせることです。熊本県下には、こんな〝創る〟遊びが伝わっています。

●ちょんかけごま（熊本市）

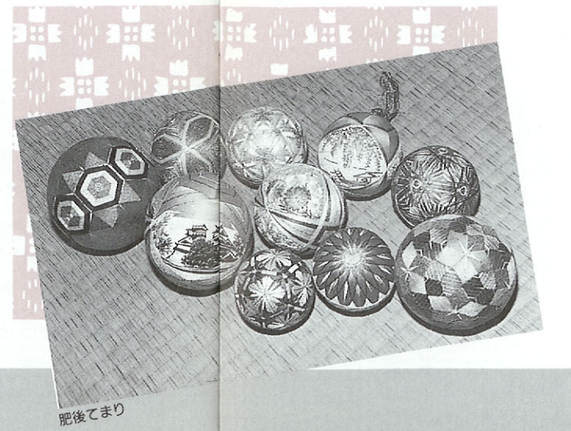
平たいこまが、細ヒモの上で自在に舞うちょんかけごま。今では、テレビや新聞で時々紹介されるだけになったが、昔は学校の運動場や広場で皆が遊んでいた。連続してすばやくはね上げる「小振り」、左右の足を交互に上げながら股の下を通す「股くぐし」。様々な技があり、一つでも多く習得するため、上達するため、皆一生懸命に練習していた。戦後、徐々にすたれてゆき、技ができる人も少なくなっていった。そこで昭和二十五年頃、ちょんかけを伝承させるために保存会が発足。毎月第二日曜日、加藤神社の境内で練習している。

■お問い合わせ
森内俊雄（保存会会長）
住所＝熊本市大江六丁目三〇―一九
▲096・364・0336

●肥後てまり（熊本市）

美しい幾可学的模様。そのパターンは作る人の創造性によって無限の広がりをもつ。

■お問い合わせ
後藤照
住所＝熊本市大江二丁目一四―一〇
▲096・372・6628



肥後てまり

交わる

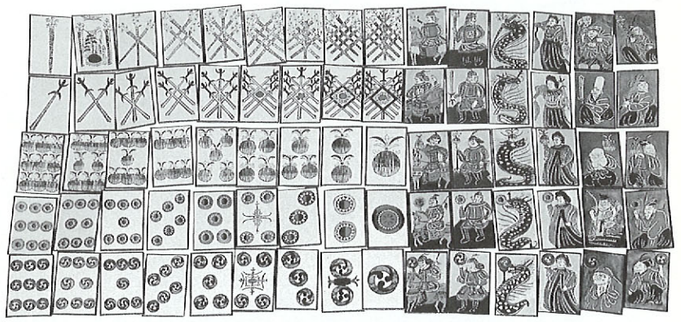
「私が子供の頃は道でメンコを打ったりして遊んでいました。子供の集団の中で、年上も年下もいた。年上の子からいろんなことを教えてもらいました。鳥をとるワナの作り方だとか……。私は今でもそういう〝縦のつながり〟的コミュニケーションが大切だと思いますね」。

荒井正俊さん（熊本市内出身・在住／36歳）。

「〝親取ろ子取ろ〟なんて遊びが楽しかったですね。四、五人一列に並んで、先頭が親、後ろが子。子を鬼に取られないように守るんです。いつも校庭で大はしゃぎしてました。今では運動場で遊ぶ子供の姿も見られませんね。家にとじこもらないで、外で遊ぶ元気な姿が見たいものです」。

橋本美代子さん（上益城郡御船町出身・在住／59歳）

何人か集まれば、それは立派な一つの社会。年上、年下、同い年……入り交じって遊ぶうちには自然にルールが生まれます。その中で何を学ぶのか、どう教えていくのか、社会の基本がそこから始まるのです。



ウンスンカルタ

●ウンスンカルタ（人吉・球磨地方）

人吉・球磨地方に伝わるウンスンカルタ。その起源はポルトガル船によって長崎にもたらされた天正カルタにあるという。

トランプでいえばハートやクラブに当たるパオ（棒）、イス（剣）、オル（硬貨）、コツ（杯）、グル（うず巻）の五種類のカードが、それぞれ一～九の数札と絵札六枚の計十五枚を持つ。カードの総数は七十五枚。絵札の力の強い方から、スン・ウン・ソータ・ロバイ・レイ・カバと呼ぶところから「ウンスンカルタ」の名があると言われている。

昭和の初め頃までは広く遊ばれていたこのカルタも、時代の流れの中で遊べる人も、札もなくなりかけていた。伝統的なこの遊びがこのまま滅びてはいけない、と復興に力を注ぎ始めたのが鶴上寛治さん（57歳）。数少なくなったウンスン朋輩（ほうばい）のもとに通い、遊び方を教わり、札を自作した。現在、太陽の家というカルタ道場を自ら開き、百人一首などとともに近所の子供たちや、カルタを伝承していきたいという人たちに教えている。鶴上さんのこの情熱で、一時は消えかけたウンスンカルタの灯が、再び人々の間にともりつつある。

■お問い合わせ
鶴上寛治
住所＝人吉市西間上町二五九三
▲0966・24・7597

●板相撲・板角力（八代市日奈久）

毒殺された相撲取り、島ヶ崎宇太郎の霊を慰めるために作られた〝板相撲〟。中央に差した棒を捻（ひね）って遊ぶ。

■お問い合わせ
桑原健次郎
住所＝八代市日奈久中町三一五
▲0965・38・0336

板相撲

遊びの中にある数限りない要素。子供たちは様々な玩具・遊戯を通して、情緒・健康・社会性・道徳心や知識・巧知性を育んできました。時代が変われば当然遊びも変わります。情報化時代と呼ばれる現代はまた、平均化時代とも言え、地域による特色が減り全国一律に同じ遊びが流行するようになりました。地方独自の遊びには独自の文化背景があったことを考えれば、今は「遊び」をもう少し真剣に考える時かもしれません。

「お正月には新しい手まりを買ってもらう、それが我が家の習慣でした。手まり遊びをしながら歌った歌は、川中島合戦の歌で『妻女山は霧深し、千曲の川は波荒し…』。昔の遊びを思い出したら、ふるさとを愛する心が戻ってくるようです」。

杉山久子さん（下益城郡小川町出身・在住 75歳）。